

2009年3月  
第2回国際シンポジウム

西 真如  
東南アジア研究所・G-COE 特定研究員

セッション4

セッション4の目的は、近代の思想が前提としてきた人間と自然の二元論をのりこえて、アジア・アフリカ諸地域で生活を営む人びとの世界と、生命圏および地球圏における生存の論理とを橋渡しする議論をおこなうことであった。

このセッションでは、4つの報告がおこなわれた。西は、地域住民による HIV/AIDS 問題への取り組みの事例について報告した。エチオピアのグラゲ県では、HIV 感染の拡大が地域社会の結婚制度や農業生産に影響を与えている。また HIV 検査の普及は、集団内の不一致を顕在化させ、感染した者と感染していない者との共存という問題を提起している。グラゲ県住民は、共同労働組織をつうじて HIV の影響を受けた世帯の生計を支える運動を展開し、ウイルスとともに生きる社会をつくろうとしてきた。

木村は、イスタンブールの住民が地震と「ともに生きる」ための知識を習得する過程について報告した。彼らの中には地震の問題を、イスラミ的な世界観と結びつけて理解しようとする者が少なくなかったが、同時に住民の中には、地震学者が発信する情報にもとづき、彼らの生活する都市の「脆弱性」を理解した上で、地震に備えようとする動きも見られた。彼らは科学、宗教、および伝統的な価値観を独特の方法で混合することにより、地震とともに生きるための知識と実践とを発展させてきた。

マートは、稲作の科学技術に関する検討から、技術と社会制度、および持続性の問題について考察した。マートによればわれわれは、テクノグラフィと呼ばれる分析・記述手法をもちいることで、人間の社会と、生命-物質世界 (bio-material world) との相互作用が、多様な技術のありよう (technicalities) を発展させてきたさまを理解することができる。農学・遺伝学と関連した稲作技術の地球規模の展開について検討することで、われわれは人間と環境との関係が常に変化していること、またそのような変化の中で持続性の問題を考えねばならないことを知ることができる。

これら3つの報告を受けて田辺は、人間圏の再構築をおこなうためには、生命圏のパースペクティブにもとづいた「生存の倫理」について再考する必要があるという趣旨の報告をおこなった。人と人および人間と自然との関係性のなかで生命を理解し、そこに文化的な価値を付与してゆくことが重要である。こうした理解は、アジアおよびアフリカの地域社会で生活する人びとのあいだに広く見いだされる。生命圏のパースペクティブが持つ潜在力を、人類が持つ最先端の技術（たとえば医療技術、地震に関する技術、農業技術）と結びつけることによって、持続的な生存圏を構築できる可能性が高まるのである。

以上の報告に対して、コメンテーターの速水と田中は次のように述べた。速水は、人間と人間、および人間と自然との関係性を再考するにあたって、上記報告の視点に加えてリプロダクションの視点が重要であると述べた。近代的な家族制度によって規定される関係性を相対化し、われわれの生のつながり、および将来の世代とのつながりを再考する必要がある。また田中は、人間圏の概念について、単に地球圏や生命圏に内包された圏としての人間圏を想定するだけでなく、地球圏・生命圏・人間圏のあいだの関係性そのものをとらえることを可能にする、より包括的な概念としての **humanosphere** を想定する必要があると述べた。